

朝鮮通信使史跡探索 (三)

中 川 浩 一

安芸国蒲刈（現・広島県）を出港した朝鮮通信使の船団が、次に寄港するのは、備後国鞆の津（現・広島県福山市鞆）であった。現在の航洋汽船は、瀬戸内海の中央部を機械推進で順調に航行するが、帆船交通時代には、逆風をさけ、順風が吹きだすまでの風待ちに加えて、潮待ちが必要であった。風や波による障害をさけるため、島々の間をぬい、なるべく本土に沿う航路が選ばれた。^{注1}

こうして生じた風待ち、潮待ちの重要拠点のひとつが鞆であった。それは外海から豊後水道、紀伊水道を介して瀬戸内海に流入する潮流の波が出会う接点で、鞆の沖に広がる備後灘と水島灘という条件にも支えられていた。強風による波とは別に、満潮の波にさからつて航行するのも、風頼よりの低速では困難だし、引潮の波に乗れば、航行は順調だったからである。^{注2}

鞆への道をたどる

福山駅、松永駅を結んで走るJR山陽本線の線路を底辺において、丘陵性の山地が備後灘に突出する沼隈半島の南東端に、鞆の津は位置している。福山市に合併されるまでは、沼隈郡鞆町の中心集落であった。

江戸時代には瀬戸内海有数の港湾集落であった鞆の津を凋落させたのは、汽船の普及に加えて、瀬戸内海航路の汽船交通と競争しながら線路を西に延していつた山陽鉄道（現・JR山陽本線）の鉄路と遠く距たる位置になったためでもある。

山陽本線との連絡をはかるべく大正二（一九一三）年十一月十七日に

開業した鞆軽便鉄道も、アジア・太平洋戦争後、一九五〇年代前半から急速に大型化し、性能を向上させたディーゼル動力のバスに圧倒されて、昭和二十九（一九五四）年二月二十八日に営業廃止へ追いこまれている。鞆鉄道と社名を変更していた鉄道会社にとって幸いだったのは、自社直営のバスが運輸営業を継承したことである。^{注3}

現在は福山市鞆町を名乗るかつての風待港・潮待港へ出向くときには、福山駅南口駅前広場の西縁に位置するバスターミナルから、いままも鞆鉄道を名乗るバスを利用して三十分ほどが必要となる。走りだして五分ほどで芦田川を草戸大橋で渡り、右岸沿いに南下するけれど、このあたりが中世に備後長和庄の年貢積出港として繁栄を極めながら、芦田川河口の南下、福山城下の発展に伴う干拓での変貌に加えて、洪水による埋没のため久しく忘れさられていた草土干軒の遺跡が広がる個処である。^{注4}

朝鮮通信使ゆかりの対潮楼

鞆が朝鮮通信使ゆかりの地と気付いたのは、当時八十八歳であった老母を瀬戸大橋見学に連れていった一九九二年秋であった。屋島に一泊後、丸亀からフェリーで瀬戸大橋を至近に眺めながら、これも風待港で名をはせた下津井（現・岡山県児島市下津井）に着いた。バスで倉敷にでて、JRに乗り換え、福山へ着いたのである。次の宿泊地を鞆に選んだのは、瀬戸内海随一の風光を誇る土地を訪ねたいとの老母の希望によってであった。

この地が朝鮮通信使ゆかりの地と気付かされたのは、宿泊した鞆シー



図① 対潮楼参観入場券

サイドホテルの売店で福山市鞆の浦歴史民俗資料館が編集した『朝鮮通信使と福山藩港・鞆の津』を見かけて購入して以来である。一九九一年から始つた茨城大学と韓国忠北大学との学生交流を支援して、夏期短期留学生に日韓交流史の講義を始めていたから、恰好の資料と感じとつていた。この冊子は一九九〇年に開催された特別展覧の解説用に刊行されたものである。^{注5}

この冊子を介して、鞆で朝鮮通信使と最も深くかかわつたのは、正使、副使、従事官などの上々官が宿舎とした海岸山福禅寺に客殿として設けられた対潮楼であった。ちなみに、二万五千分の一地形図「鞆」図幅（岡山及丸亀一〇号―二）には、史跡・名勝・天然記念物の記号に「朝鮮通信使遺跡」の注記をほどこすが、記号が記されている位置は鞆城跡で、本丸がおかれた小丘の部分にあたり、ここに前記の資料館は建っているが、対潮楼は、南東の見おろす位置にある。

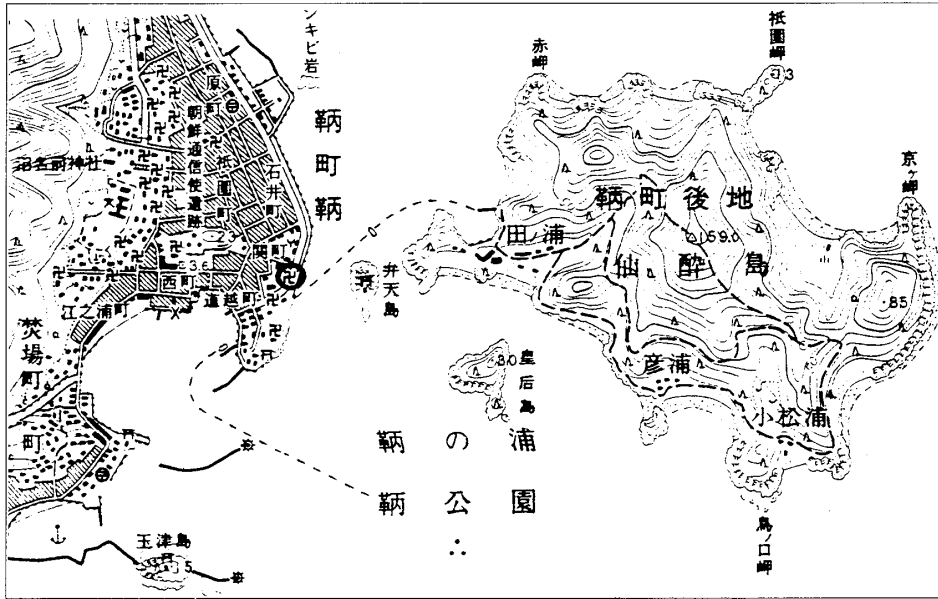
迎賓館であつた対潮楼

対潮楼は、鞆の津で朝鮮通信使を接待した福山藩が、元禄年間に建てた迎賓館で、福禅寺本堂の東隣りに位置している。^{注6} 常時公開されており、一九九二年当時は、第十次通信使来日に際し、正使の子息洪景海が大書した「対潮楼」の揮毫を配した参観入場券を交付したが、一九九六年・一九九七年当時は料金を受けとるだけであつた。

福山市鞆の浦歴史民俗資料館の展示によると、鞆にも上関や蒲刈と同じく「御茶屋」を設けていたが、対潮楼の設置以後は、身分低位の随員たちの宿舎にあてられていた様みにみとれる。対潮楼の設置以前も、正使、副使、従事官は、福禅寺に宿泊した。^{注7}

対潮楼と名付けたのは、第十次通信使の正使洪啓福であつた。このとき、藩主阿部正福は病気で江戸藩邸にとどまり、前例を知らずに接待した幕府代官が三使の宿舎を阿弥陀寺に割りあて、怒つて宿泊を拒否された往路のトラブルがあつた由である。^{注8}

対潮楼は、明治三十年ころ撮影の写真（歴史民俗資料館展示）によると、海岸の波打際に高い石垣を築き、見晴よく建てられていた様子が読



地図① 1 : 25,000「靉」(平成7年修正)

⊕が対潮楼

∴の位置が靉城跡

みとれる。現状は前面にバス道路が作られ、海岸はコンクリートの堤防に沿っている。一九六〇年ころ撮影の斜め空中写真でも、^{注9}対潮楼は海に直接臨むから、環境破壊は高度経済成長期の仕業であろう。道幅の狭い靉の旧市街で道路を拡げることの困難さが、安易な方法を選ばせての漁港への取付交通路建設になったのだと思われる。

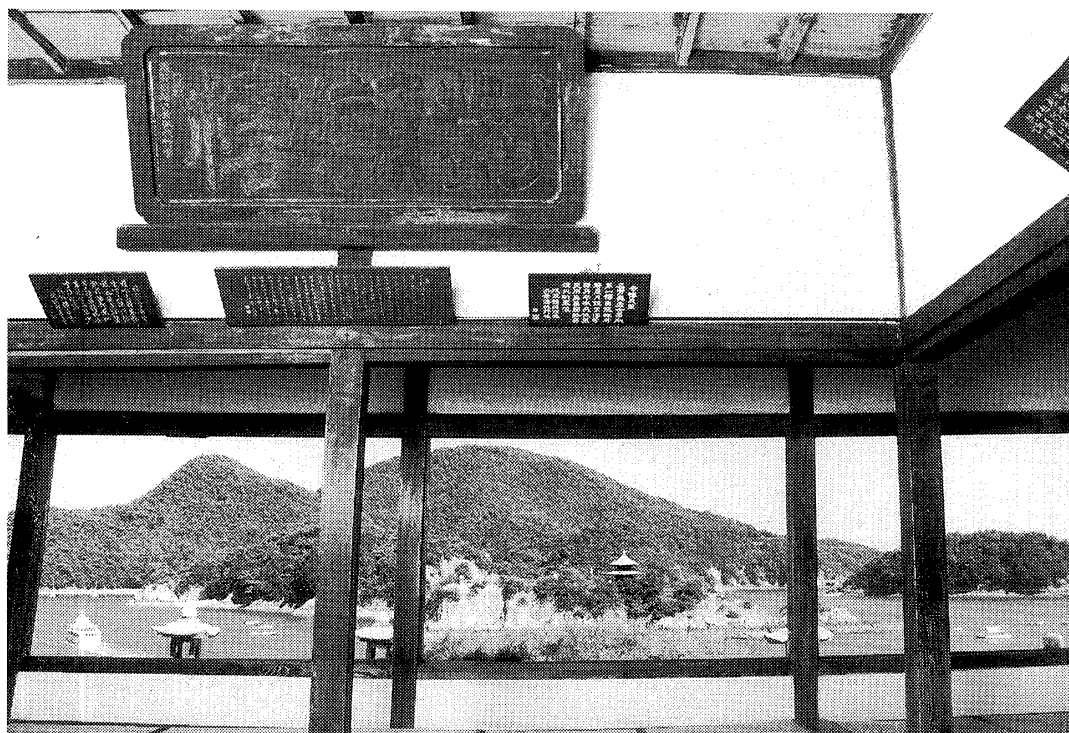
靉は日東第一の形勝

対潮楼のなげしには、洪景海が二枚の紙に分けて揮毫したものを、藩主阿部正福が模刻させた額が掲げられている。^{注10} 縦六三センチ・横一七五センチにもなる大作である。

対潮楼の東側は窓が大きく開かれ、頂きに堂塔を配した弁天島、背後



写真① 靉城跡から眺めた靉の浦
左の大屋根が海岸山福禅寺
(1997年12月撮影)



写真② 対潮楼から東方を望む
頂きに塔を配した弁天島の背後に仙酔島が重なる
(1996年入手)

に全山松林の仙酔島が重なる風光を觀賞できる。これが瀬戸内海随一ともてはやされる所以は、第六次通信使の従事官南竜翼が『扶桑録』に「若し海路の形勝を論ぜば即ち当を以て第一となすべく、而して洞庭と雄を争うべきなり」と輓を評した事実によるとされている。

この評価が、第八次通信使の従事官李邦彦に「日東第一形勝」の揮毫をなさせる遠因ともなった。額装されていた原書が痛んできたので模刻して額にし、なげしに掲げたものと思われ、提唱したのは福山藩の儒者菅茶山で、文化八年（一八一一年）の作とされている。^{注11}

「対潮楼」の額と同じ壁面に掲げられた三枚の額の中で、中央に位置するのは、「日東第一形勝」選定の由来と、第八次通信使の三使による七言律詩三首も併せ額装した経過を菅茶山が記した「開板の詞」である。この中で、菅茶山が「朝鮮貢使」の語句を用いたのは、対等の外交関係を無視するもので、不適切な表現とみなさなければならぬ。

「日東第一景勝」の評価は、江戸からの帰途、対潮楼に泊った正使以下八人が、この地の景色が日本で一番良いといったのに対し、同席した通訳官が、対馬から江戸までの一万里の中に、ここに比敵する処が一つ二つはあるのではないかとたずねたのに対し、合せて十六の眼が一致してここが一番と保証したのだと、「開板の詞」は述べている。^{注12}

通信使も愛飲した保命酒

福山市輓の浦歴史民俗資料館が建つ輓城本丸跡に登ると、眼下に古代から広く名を知られた輓の浦（輓港）の全容が眼に入る。この地には遣新羅使がたち寄って万葉集に歌を残し、任地で妻を亡くした大伴旅人は、輓の津において、「輓浦の磯の室の木見むごとに 相見し妹は忘れえぬや」と詠んでいる。この歌碑を、対潮楼崖下のかつて波打際だった地点にみる事ができる。

輓の浦は、対潮楼をつけ根の位置におく小半島で東からの風波を防ぎ、湾曲した形状を示すのだが、現状は商港としての機能は皆無で、漁港としても沿岸漁業に対するにすぎない。

港の北東隅に、江戸期の繁栄を偲ばせる石造の常夜灯と潮の干満にか

かわらず任意に上陸乗船を果たせる石積階段状の「雁木」が残り、現用に耐えているが、築造は一八一一年とされるから、朝鮮通信使とのかわりは存在しない。

狭い道路が複雑に入りこむ軈の街なみを散策すると、江戸時代の初めから醸造されてきた薬酒「保命酒」の店舗をいくつも眼にすることができ、万病と長寿に効くとして全国的な販路をもち、容器としての絵付け徳利は美術品としても喜ばれ、中には朝鮮通信使による漢詩を焼付けたものもあった。

一九九〇年開催の福山市軈の浦歴史民俗資料館特別展覧に出品された個人蔵の「保命酒徳利色絵付け・赤絵」には、朝鮮巖樓の署名入りで、「道で軈の津のゆかしくかもした酒の味の清しいことを聞いた。その効用は寒い時は寒さを除き、暑い時には暑さを追い払い、愁いや苦しみを抜け出させてくれる。李白に金亀の飾りものを酒に換えてもてなした故事の様に、私も幾度か金亀に換え様と思った。舟行数百里の道のりを何のために来たのだろう」の詩が書かれていた。^{注13}

牛窓の代名詞「唐子踊」

軈を出港した船団が備讃諸島の島々の間を抜けて次に入港するのは、備前国牛窓であった。^{注14}その地は現在、岡山県邑久那牛窓町の中心集落を構成している。



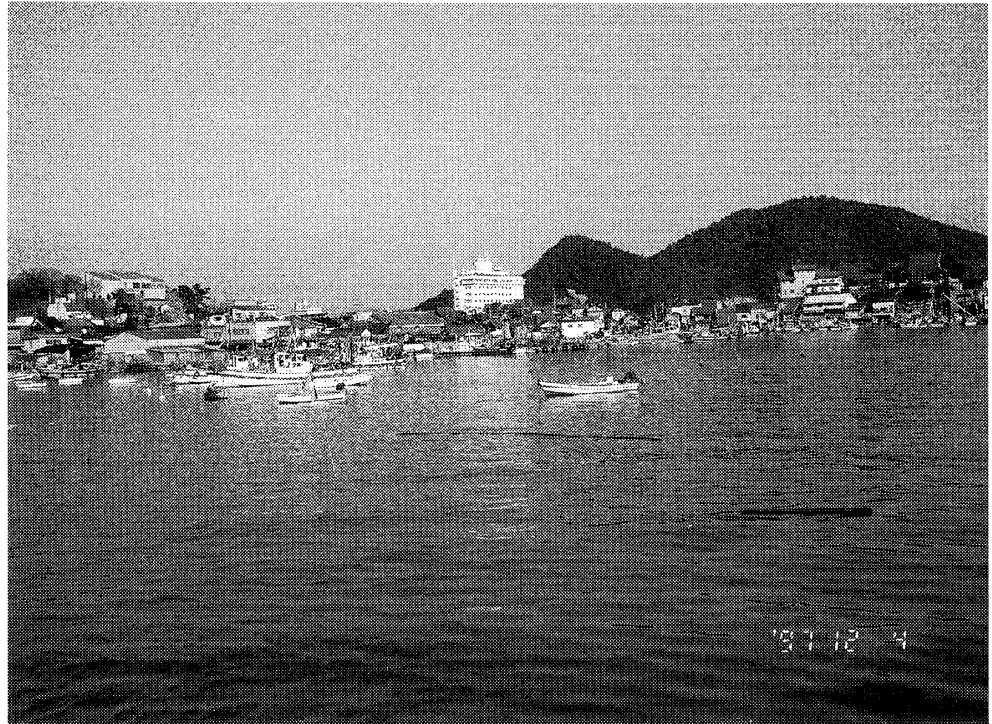
図② 軈歴史民俗資料館入場券に描かれた江戸期の軈の浦



写真③ 東方から眺めた対潮楼
往時は崖下が海岸線であった。崖下に大伴旅人の歌碑が建つ
(1997年12月撮影)

『JTB時刻表』によると、牛窓へはJR岡山駅から両備バスの便があり、一時間二十分ほどを要している。ほかにJR赤穂線邑久(おく)駅で接続するバス路線があることを、現地の観光案内所で教えられた。

牛窓で朝鮮通信使を接待したのは岡山藩だが、この地は朝鮮側も「通信使」を名乗った寛永十三年(一六三六年)の第四次朝鮮通信使の来日以来、幕府によって迎接所に指定された風光明媚の土地で、長旅の疲れ



写真④ 西方から眺めた鞆港
左隅の丘上に鞆歴史民俗資料館、中央のビルの右に対潮楼が建つ
(1997年12月撮影)

をいやし、道中の慰安をはかっている。^{注15}
今日、朝鮮通信使とのかかわりに言及するとき、牛窓がたびたび引き合いにだされるのは、この地に伝わる伝統芸能としての「唐子踊」の存在ゆえであろう。それは平成九年度から向う四年間、全国の中学生の約四割もが使用する歴史的分野の教科書『新編新しい社会』歴史（東京書籍）の記述を介して、さらに著名度をますかと思われる。牛窓町紺浦の



図③ 唐子踊

疫（やく）神社で毎年十月の秋祭に、神事として奉納される稚子舞いが、それである。

主役を勤める二名の踊子は、紺浦に住む十歳前後の男児で、異国風の鮮やかな色彩の衣装をつけ、小太鼓、横笛と歌に合わせて踊るのだが、動作は他に例をみない独特なものと呼ばれる。歌詞は日本語ではなく、解読も不能とされてきた。

「神功皇后三韓征伐」に由来するとの説明がなされた時期もあるけれど、現在ではこの地に滞留した朝鮮通信使一行中での小童による舞踊が起源と考えられている。^{注16}

三使の宿舎になった本蓮寺

牛窓で三使の宿泊に供された施設では、法華宗の名刹経王山本蓮寺の客殿『学士館』が現存する。牛窓港にのぞむ台地に三重塔を配して建つ本蓮寺には、通信使の正使、副使、従事官、製述官などが記した紙本墨書を始め、おみやげとして残したかと思われる青磁の硯屏、青磁の花入れが保存され、交流の様子を伝える貴重な資料となっている。

国指定重要文化財としての本蓮寺は、中国・四国、九州では最も古い



写真⑤ 本蓮寺境内からみた牛窓港
右端に一字波止がみえる
(1996年4月撮影)

法華宗の寺院であり、正平二年（一三三七年）創建と称される。古い建造物がよく保存され、国指定の重要文化財五件に加え、県指定の重要文化財が二件あり、また境内も平成四年に国重要史跡の指定を受けている。客殿としての書院には「謁見の間」が保存され、ここが三使と藩主の

対面に用いられた。享保九年（一七二四年）に改築されているから、第十、第十一次の通信使接待に供された状況を、いまに伝えるとみるべきだろう。^{注17}

書院は予約すれば見学に応じる由だが、全く予備知識なしの探訪であったため、筆者は未見に終わっている。

牛窓港は、一字波止と呼ばれ東西方向に六七メートルも延びる中二・七メートルの石積防波堤により、泊地の機能を維持してきたが、この施設は、元禄八年（一六九五年）岡山藩主池田綱政が、僅か八か月の工事で完成させたもので、以来牛窓港は瀬戸内海有数の避泊地となり、市街は牛窓千軒の名をほしのままに繁栄を保ったのである。^{注18}

通信使資料も展示する博物館

一字波止によって風波から守られる牛窓港にのぞむ海岸通りに、白塗りの木造平家で「海遊文化館」を名乗る博物館が建っている。警察署として用いられてきた建物の転用で、開館は一九九一年であった。

館内は、だんじり展示室、朝鮮通信使資料室にわかれている。「だんじり」は、地元氏神の秋祭に街路をねり歩く船型の山車で、八基が現存する。岡山県指定重要有形民俗文化財で、展示室にはその現物が保存展示されている。

朝鮮通信使資料室は、善隣友好の歴史を全国的な視点から展示する中で、牛窓とのかかわりも明らかにされている。通信使高官の等身大像も展示され、豊富な画像資料も用意されているが、下蒲刈町の「御馳走一番館」と比べれば見劣りはまぬがれない。展示図録の用意はなく、有料入場の際に配布されるパンフレットだけなのは惜まれる。

牛窓と朝鮮通信使のかかわりについては、牛窓町が企画し山陽映画に製作させたビデオ『牛窓と朝鮮通信使』によって、その具体像が明らかとなり、教材としても有効であった。一九九七年度の二年次学生用に設定した演習で視聴させたビデオがこれである。

朝鮮通信使の一員として来日した小童が演じた舞踊が起源と今日では考えられている「唐子踊」についても、牛窓町企画・山陽映画製作のビ

デオ『牛窓』の中に、その全容が収められる。この二本のビデオは、海遊文化館と至近の位置にある観光案内所で入手した。唐子踊りを形どった土人形も、ここで販売されていた。



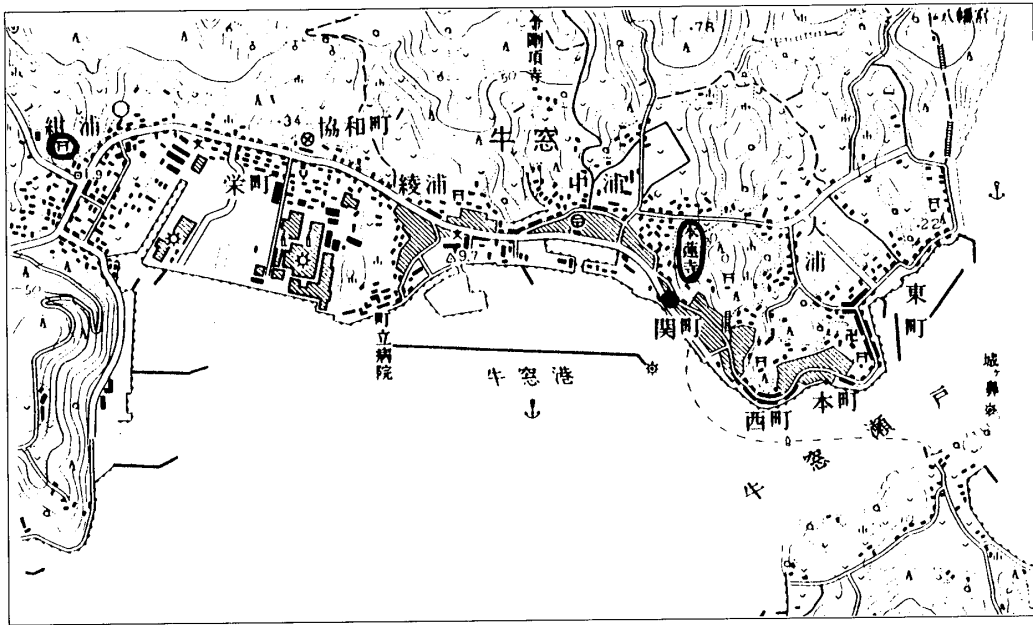
写真⑥ 本蓮寺本堂脇から三重塔をみる
(1996年4月撮影)

設置の由来が判る「御茶屋」の井戸

観光案内所で朝鮮通信使にかかわる史跡の所在を訪ねた処、本蓮寺のほかに、三使の宿舎になったこともある「御茶屋」の跡があり、また「朝鮮通信使」一行を迎えるために掘られた井戸が、現在も使用されている



写真⑦ 本蓮寺客殿「学士館」
玄関わきのそてつは往時からのもの
(1996年4月撮影)



地図② 1 : 25,000 「牛窓」(昭和62年修正)
 ⊕が「唐子踊り」の疫神社
 ●が「海遊文化館」

と教えてくれた。^{注19}
 李進熙「李朝の通信使」に収載の「牛窓宿所割図」によると、「御茶屋」は海に面して建てられ、また海岸には、処々に上陸乗船用の「雁木」が設けられていた事実が読みとれる。三使以外は、町家が徴用されての宿泊となったが、そのため来朝から帰帆までの数か月間にわたって、家人



写真⑧ 牛窓町立海遊文化館
 背後に本蓮寺三重塔がみえる
 (1996年4月撮影)

は自分の家に立入ることを禁止されたという。^{注20}
 「御茶屋」の位置は西町であった様に前記の地図からは読みとれるが、現地では標識が見あたらず、位置を特定できなかつた。通行する人に、「御茶屋」の跡はどこですかとたずねたら、喫茶店の位置は判るが、御茶屋は知らないとの見当はずれの答えしか得られなかつた。観光案内所で



写真⑨ 「御茶屋附井戸」
手前の石板に開削の由来が記される
(1996年4月撮影)

入手したイラストマップにも御茶屋跡の記入がない点からも、下蒲刈町に比べると、関心の度合いはいまひとつ薄い様に見てとれた。

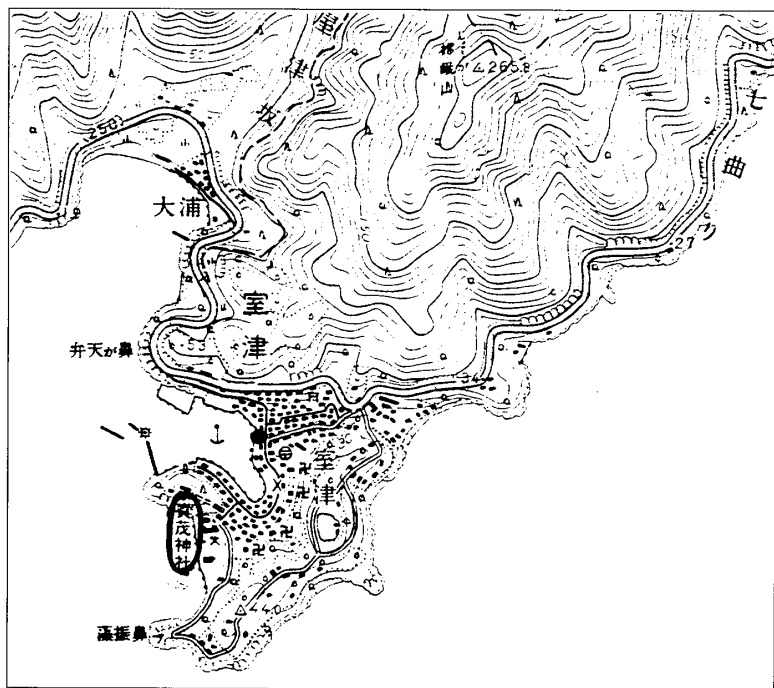
「御茶屋」での接待にあてるため、西町の崖下に掘られた井戸については、袋小路の奥に現存するのを、「発見」することができた。

石材で囲壁を作り、小屋がけした釣瓶井戸で、石板に設置の由来が陰刻されており、往古朝鮮人來朝ノ節御茶屋附トシテ……の文が読みとれる。^{注21}

隔離した位置にある室津

牛窓について船団が寄港したのは、播磨国室津（現・兵庫県揖保郡御津町室津）であった。一七一九年の第九次通信使の場合には、牛窓を朝に出港し、その日のうちに室津へ着いている。^{注22}

室津への公共交通の便は、今ではあまりよいとはいえない。JR姫路駅からは山陽電気鉄道利用で飾磨乗換、電鉄網干下車、神姫バスに乗り継いで室津東口下車のほか、JR網干駅で降りて神姫バスを電鉄網干で乗り継ぐ方法もある。



地図③ 1：25,000「網干」(平成7年修正)
●が「室津海駅館」

室津は御津町域の南西端に位置し、丘陵状の半島の最先端に弧立して存在する。町役場があり、播磨平野の西端にあたる主要市街とは全く隔離しており、七曲りと称する山裾にヘアピンカーブを連ねる道路を介して結ばれる。

こうした条件にもかかわらず、室津が瀬戸内海航路の重要港になったのは、二重に湾入して風波をさげえた地形に由来しよう。

早くから瀬戸内海航路の良港として知られた室津は、奈良時代の『播磨風土記』に室原泊^{むろのつどまり}として登場している。江戸時代、参勤交代の西国大名たちが室津にたちよることも多く、そのため本陣が設けられた。明和元年（一七四六年）当時、六軒の本陣が存在したと記されるから、その繁栄ぶりがうかがわれよう。^{注23}



写真⑩ 室津賀茂神社
左右に回廊を配した唐門の背後が本殿
(1997年9月撮影)

廻船交通の中継地となったのも当然で、その遺構が商品販売と運送業をかねた買積廻船問屋の建物として複数存在する。

特異な境内の賀茂神社

室津にたちよった朝鮮通信使についての現地資料は、賀茂神社に姫路藩が奉納した第六次通信使の接待記録『韓客過室津』の巻物である。^{注24}これとは別に、一九九〇年にその存在が世に知られた『室津朝鮮通信使来航図屏風』は、室津にたち寄った最後の朝鮮通信使である宝暦十四年(一七六四年)の第十一次通信使来航の状況を克明に描いている。^{注25}

室津港の南岸を構成する丘状の小半島の頂上に位置してきた賀茂神社は、御津町教育委員会による説明表示板では、創建およそ二千年にもなる長い社歴と解説され、平安時代に京都市賀茂神社とのかかわりを持つに至った由である。

大小二十九棟の社殿中で最古の本殿が、長祿三年(一四五九年)建築という歴史を持つているのに加え、広庭を隔てて拝殿がかけ離れる「とび拝殿」という特異な境内で、神社建築の古い形態を保存する点でも貴重と説明されている。

本殿を中央においたあわせて五棟の社殿は、椀皮葺で流れ造りという賀茂神社の伝統を正確に伝える点でも、貴重と称される。唐門を中央におく左右の回廊を含めて、これらが国の重要文化財に指定されている。

東側から階段を登り、鳥居をくぐると広庭に入り、南面する本殿を目の前にみるわけである。本殿背後は森となるので、深く湾入する室津港の展望はえられない。

豪商の屋敷が博物館となる

室津での迎賓館は、藩主の別邸として用いられた「御茶屋」で、その位置は町役場の出張所として機能する町民センターの建つ一面と比定される。

室津港の南岸には、豊臣秀吉の大坂築城当時、西国大名が運搬中に海中へ落したと称される巨石が、一九七二年に実施された漁港修築当時に引きあげられ、展示されている。その置かれる位置が、往時の「御番所」跡との表示があった。

室津での朝鮮通信使とのかかわりについては、「室津海駅館」を名乗る町立歴史資料館に展示がある。この施設は、本陣を補完する間どりを備えた豪商嶋屋（三木）半四郎の屋敷を転用して開設された。

江戸後期の建築で、主屋は桁行八間半、梁間六間の木造二階建平入、東西庇付、切妻本瓦葺である。この建物の一階部分が博物館となり、廻船、参勤交代、江戸参府、朝鮮通信使の四部に分けての展示がなされている。

展示図録は作製されておらず、「御津町立室津海駅館」と題するパンフ

レットが用意されるにとどまるのは残念である。

「朝鮮通信使」の部でのメインな展示は、大きなガラスケースに収められた朝鮮通信使行列人形と朝鮮通信使饗応料理の復元模型だが、下蒲刈町の「御馳走一番館」での完全復元には及ばない。

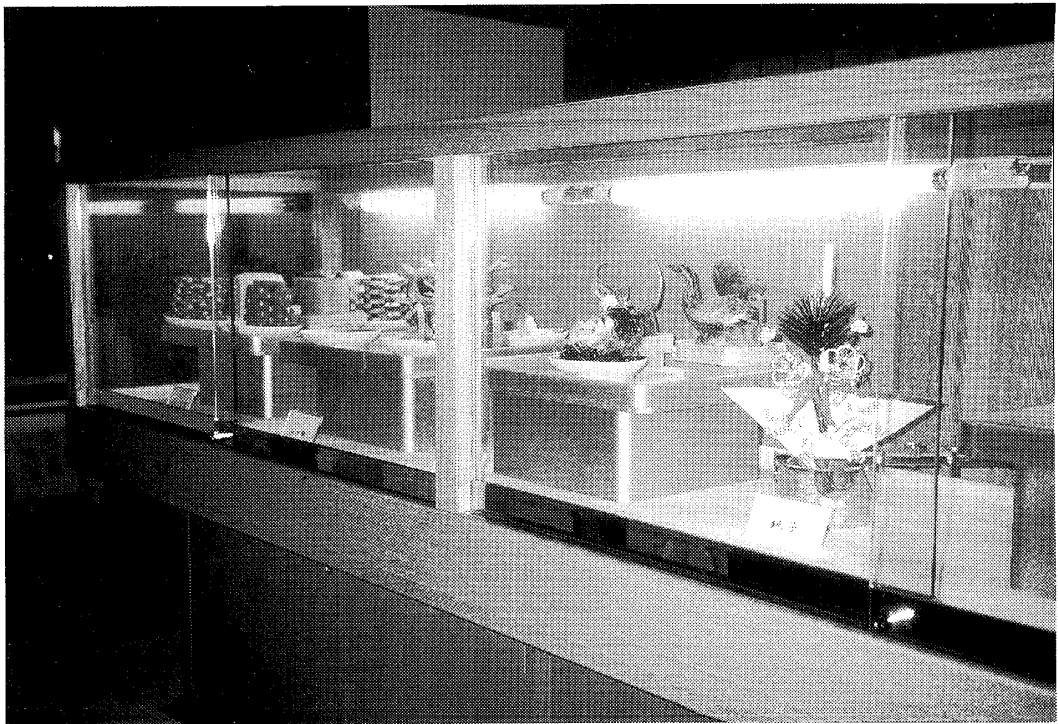
嶋屋が商家であるにもかかわらず、本陣に準ずる様式で建築されたのは、繁忙時に本陣には収容できなかった賓客を迎えるためであったとされている。^{注26}

写真⑩ 空からみた室津港と街なみ

右手よりのビルが「御茶屋」跡の町民センター
「郷土の歴史」による。一九八〇年代後半の状況



写真⑪ 「嶋屋」の遺構を転用した歴史資料館の「室津海駅館」
(1997年9月撮影)



写真⑬ 「室津海駅館」に展示される「朝鮮通信使饗応料理」の復元模型
(1997年9月撮影)

注

- (1) 岩波書店編集部『日本の地理』6 中国・四国編(一九六一年)岩波書店、一〇八ページ。
- (2) 鞆の沖合いは東西からの潮流の出会い場所との説明が、福山市鞆の浦歴史民俗資料館の展示でなされている。
- (3) 宮脇俊三編『鉄道廃線跡を歩く』Ⅳ (一九九七年) JTB、一三四ページ。
- (4) 国立歴史民俗博物館『日本の歴史と文化・国立歴史民俗博物館展示案内』(一九九五年) 歴史民俗博物館振興会、四七ページ。
- (5) 一九九七年十二月現在でなお在庫している。
- (6) 浅香・木内・児玉編『図説日本文化地理大系』5 中国Ⅱ 広島・岡山・瀬戸内海(一九六一年) 小学館、一一八ページ。
- (7) 池田一彦「福山藩と朝鮮通信使」『朝鮮通信使と福山藩港・鞆の津』所収 三十九ページ。
- (8) 注(7)に同じ。
- (9) 注(1)の一〇六ページ。
- (10) 石井六郎「対潮樓の扁額について」『朝鮮通信使と福山藩港・鞆の津』の四十六・七ページ。
- (11) 注(10)の四十五、四十七ページ。
- (12) 注(10)の二十六ページ。
- (13) 注(10)の二十八ページ、原詩は
聞道鞆津醞味清 敲寒驅暑破愁城 幾回欲換金龜者 其奈舟行数百程
である。
- (14) 風波が激しいときには、牛窓へ直行せず児島半島南岸で備讃瀬戸をのぞむ日比(現・玉野市日比)で船がかりした。
- (15) 辛基秀「瀬戸内をゆく朝鮮通信使」(『牛窓と朝鮮通信使』(一九九三年)牛窓町に収載)五ページ。
- (16) 注(6)の一七七ページ掲載の写真に、神野功(岡山県教育委員会)は、唐子踊りもこうした背景(朝鮮との)から起ったものであり、六、七歳の男

の子が二人、朝鮮風の服装で踊る手ぶりも、いかにも異国めいておもしろい。また若衆たちが笛に合わせて歌う文句も、まったくわからないが、おそらく朝鮮のことばがしだいに変化したものであるう」と解説した。

(17) 経王山本蓮寺発行のパンフレットによる。

(18) 岡山県牛窓町企画・山陽映画製作ビデオ『牛窓―その文化と心』による。

(19) 牛窓町『牛窓と朝鮮通信使』(平成5年)十四ページによると、本蓮寺に三使が宿泊したのは、一六三六年(第四次)、一六四三年(第五次)、一六五五年(第六次)で、以後は「御茶屋」が用いられた由である。

(20) 牛窓町『牛窓と朝鮮通信使』(平成5年)十四ページ。

(21) 明治十年に牛窓村西町の人々が由来を記した事実が読みとれる。「朝鮮通信使」が最後に牛窓にたちよつたのが一七六四年だったから、往時での関心の高さがうかがえる。全文は「往古朝鮮人來朝ノ節御茶屋附トシテ承応三
甲午歲六月池田家ヨリ茲ニ掘貫ノ井ヲ鑿ツ此井水清ク湧出シテ人々之ヲ喜
ブ 明治十年 六月 牛窓村西町中」と記される。

(22) 注(20)の十八ページ。

(23) 御津町『郷土の歴史』(平成元年)四ページ。

(24) 辛基秀『朝鮮通信使往来―二六〇年の平和と友好』(一九九三年)労働経
済社、四十五ページ。

(25) 注(24)に同じ。

(26) 注(23)の六ページ。